

三年 万葉・古今・新古今	単 元
氏 名	年 組 番

三代和歌集の比較

歌 集	成立年代	主な選者	特 徴	歌 風
万葉集	奈良時代	大伴家持ら	・ 現存する最古の和歌集 ・ 二十巻・約四千五百首	素朴な感動を生 き生きた歌う。
古今和歌集	平安時代	紀貫之ら	・ 最初の勅撰和歌集 ・ 二十巻・約千百首	技巧を凝らし、繊 細優美に歌う。
新古今和歌集	鎌倉時代	藤原定家ら	・ 八番目の勅撰和歌集 ・ 二十巻・約千九百八十首	自然美や繊細な 感情を象徴的に 歌う。

和歌の表現技法

○枕詞…特定の語の前に置き、調子を整える言葉。多くは五音であり、普通は訳さない。「万葉集」に多い。

○序詞…ある語句を引き出すための前置きの言葉。後に続く語句は決まっていない。省略せずに訳す。「万葉集」「古今和歌集」に多い。

○掛詞…一つの語に二つの同音の意味を重ねる技法。「古今和歌集」「新古今和歌集」に多い。



＜主な枕詞＞

あをによし—奈良
あかねさす—日・紫・君
あしひきの—山・岩
いはばしる—滝・垂水
からころも—着る・裾
しろたへの—袖・衣・雪
たちねの—母
ちはやぶる—神
ひさかたの—光・天・雲

時代によって生活や価値観などが違うから、和歌の特徴も変わってくるんですね。



そうですね。でもよく見ると、今の私たちにもつながるものの見方や考え方もあって、共感できるものもたくさんあるんですよ。



単元	三年 万葉・古今・新古今	年組番	氏名
6 問			

1 次の特徴をもつ和歌集を漢字で書きなさい。

(1) 最初の勅撰和歌集で、平安時代に成立した和歌集。

答

(2) 鎌倉時代に、藤原定家らによって編集された和歌集。

答

(3) 現存する最古の和歌集で、素朴な感動を生き生きと歌っているものが多い。

答

2 次の語の前に置き、調子を整える枕詞を□から選びなさい。

(1) 光・天・雲

答

(2) 山・岩

答

(3) 母

答

ちはやぶる	いはばしる	あしひきの
たらちねの	ひさかたの	からころも

単 元		年 組 番	6 問
三年 万葉・古今・新古今	氏 名		

次の和歌と現代語訳を読んで、それぞれの 部に使われている表現技法を答えなさい。

- (1) 花の色は 移りにけりな いたづらに
わが身世にふる ながめせし間に

答

(現代語訳) 桜の花もわたしの容姿も、すっかり色あせてしまった。長雨を眺めて、わたしが恋の悩みにぼんやりと日を過ごす間に。

- (2) ちはやぶる 神代もきかず 竜田川
からくれないゐに 水くくるとは

答

(現代語訳) こんな奇妙なことは神代の昔にも聞いたことがない。竜田川の水を（流れる紅葉が）深紅のしぼり染めにするなどとは。

- (3) 大江山 いく野の道の 遠ければ
まだふみもみず 天の橋立

答

(現代語訳) 母のいる丹後へ行く道は、大江山や生野があつて遠いので、まだ天の橋立を踏んだこともなく、母の文も読んでいません。

- (4) 御垣守 衛士のたく火の 夜は燃え
昼はきえつつ 物をこそ思へ

答

(現代語訳) 御所の門衛がたくかがり火のように、わたしの心も夜は恋の炎が燃えさかり、昼は消えてしまつて物思いに沈んでいます。

- (5) ひさかたの 光のどけき 春の日に
しづ心なく 花の散るらむ

答

(現代語訳) 日の光ものどかな春の日に、桜の花はどうして落ち着いた心もなく、こんなにあわただしく散り急ぐのでしょうか。

- (6) 瀬を早み 岩にせかるる 滝川の
われても末に 逢わむとぞ思ふ

答

(現代語訳) 瀬が速くて岩にせきとめられた滝川の急流のように、たとえ一度は二手に裂かれても、行く末には再び必ず会おうと思う。